

船井情報科学振興財団留学報告書

第五回

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

4 学期制を採用している Northwestern University では 6 月に academic year が終わります。街ではいま、卒業して寮から引っ越していく学部生の荷物を載せたトラックが初夏の緑に包まれています。2 年目である今年度は、必修のトピックスコースの単位を修得するのに費やしました。1 コースは 2 科目ないし 3 科目で構成されています。私は、ミクロ理論を 2 コース、そして経済史で 1 コースを選択しました。

私の所属する Northwestern 大学の経済学の Ph.D.プログラムでは必修の一つに経済史が含まれています。必ずしもコースとして修了する必要はありませんが、最低 1 科目は受講して単位を取得することが卒業要件となっています。そして単位を取得するためには、経済史に関する term paper を一年かけて執筆し、提出しなければなりません。それどころか、内容についても研究雑誌に掲載されるレベルのものを全員に要求しています。つまり、経済史を専門にしていなくても高いクオリティの研究成果を求められているわけです。実際には全員が投稿することは難しいですが、過去には卒業要件として提出したこの term paper を専門誌に掲載した先輩が何人もいるそうです。では、なぜ経済学を学ぶ学生がここまでして経済史を学ぶ必要があるのか、今回は私が受講した経済史の授業を振り返るかたちで考えてみたいと思います。

そもそも経済史とは何でしょうか。一言でいうならば、歴史上の経済現象や経済活動を分析する学問となるでしょう。この経済史と間違われやすいものに経済学史というものがあります。根岸(2001)によれば両者の違いは以下のように述べられています。「経済史とは、日本とかヨーロッパとかそれぞれの経済社会がどのように発展してきたかという歴史、経済社会の制度、事実、出来事などの歴史である。それにたいして、経済学史とは経済社会に関する人々の考え方がどのように変化してきたかという歴史であるといえよう。」つまり、経済史では経済学という学問の歴史をするわけではありません。加えて、経済史では、過去の社会、経済現象を対象とするため、必然的に現代の事象を扱わないという特徴があります。しかし、この特徴を除くとおよそ人間の社会活動に関するすべてが分析対象となりうるため、経済史とは非常に幅の広い学問といえます。

実際に冬学期に受講した西洋史の授業でカバーされた項目をシラバスから抜粋してみましょう。長期的な経済成長について、マルサスについて、西欧における都市と経済成長について、産業革命と技術進歩について、文化と宗教に関する経済史について、などなど。経済史の名の下に分析される対象が非常に多岐にわたることが見て取れます。分析手法も様々です。計量経済学に基づいた統計的な分析をはじめ、ゲーム理論を用いた数理的なモデルによる研究など一つの分野と思えないほどの多様性があります。これは、裏をかえせば、経済史を専門としていない学生であっても、何かしら自分が専門とする分野や分析手法を用いた研究を行える余地があるということです。

例えばですが、マクロ経済学を専門とするクラスメートはアメリカの金融恐慌時における銀行の破綻に関する研究を試みようと考えています。また、普段は医療データを用いて現代の健康、医療政策の統計分析をしているクラスメートは、過去のポリオワクチンに関する市民活動のデータから健康保険に対する態度を推定しようと試みています。

経済学に従事している学生であれば、専門とする分野に関わらず、経済史に関する研究を行い、term paper を書くことが可能であるとわかります。しかし、単に歴史を対象としていればどんな分析をしてもかまわないわけではありません。歴史に対する見方が問題となるからです。その点を明確にする経済史の専門用語として、persistent effect、歴史の持続的効果と呼ばれるものがあります。

歴史の持続的効果を学ぶ前、私は経済史を学ぶ意味をこう考えていました。過去の事象は過去のものでしかない。しかし、過去から学ぶことで現代の事象を分析する手助けになる、と。一般に社会実験のできない社会科学にとって、歴史上の事象はかっこの社会実験の記録だと思っていました。この見方は歴史を点としてみる見方とも言えます。過去に起きた事象は時系列上において点で表現でき、現在と直接関係ありません。しかし過去の事象と現代の事象の類似性から我々は現代の事象を深く理解する手立てを得るといえるのです。

授業の輪読で持続効果に関する survey 論文 Nunn (2009)を扱いました。経済成長における歴史の重要性と題された本論文では、歴史的な事象の影響が持続することによって現在を規定する効果が論じられています。例えば、survey 論文では植民地政策が与えた被植民地国への影響を分析した論文、Acemoglu, Johnson, and Robinson (2001)などが挙げられています。植民地政策は過去のもですが、植民地国がもちこんだ経済政治制度は今も受けつがれています。Acemoglu, Johnson, and Robinson (2001)では、そういった過去の植民地政策が被植民地国の現在の経済成長にどのような影響を与えているのかデータから推定することを試みています。

過去の事象は過去にとどまらず、現在にも持続した効果を与えています。これを歴史の持続的効果と呼ぶわけです。歴史的な事象を過去に完結したものではなく、今現在に影響を与え続けているものとして分析するという発想です。これは目から鱗でした。遠い昔に起きたできごとが連綿と今の社会と経済に影響を与え続けている。それゆえに歴史を学ぶ意義があるということです。つまり、過去の事象は時系列上の点ではなく、いわば線であらわされるものといえます。過去から今にいたるまで、そして場合によっては未来にまで影響を及ぼし続ける時間軸上の線、これが歴史の持続的効果といえます。

経済学の場合、経済史を専門としない限り、分析対象は現在進行中の政治経済の事象となります。しかし、対象が何であれ、マクロ経済政策だろうとミクロ的な規制の分析であろうと、そういった政策や規制は一日にしてなりません。国家の仕組みや経済活動の原理、そういったものも全て、長い時間をかけて今の形になっています。経済学を用いて社会科学に従事する上で、人類が歩んできた歴史的経路の影響を考える視点を忘れてはならない、そういうメッセージを学んだと思います。

これから一年間かけて、私も経済史について term paper を書くこととなります。経済学に携わるものとしてどう社会や歴史を見ているのか問われている気がしていますが、これからの研究を非常に楽しみに感じています。

Acemoglu, D., Johnson, S., & Robinson, J. A. (2001). The colonial origins of comparative development: An empirical investigation. *American economic review*, 91(5), 1369-1401.

根岸隆. (2001). 改訂版 経済学史入門.

Nunn, N. (2009). The importance of history for economic development. *Annu. Rev. Econ.*, 1(1), 65-92.